
十月林檎と葛城男爵

当真伊純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十月林檎と葛城男爵

【Nコード】

N0215Z

【作者名】

当真伊純

【あらすじ】

食い意地が張っていることと体力馬鹿なことを除けば、御堂神奈^{みどうかんな}はどこにでもいる女子高生だった。だから、学園の王子と名高い葛城璃人^{かつらきりひと}と関わる日など一生来ないと思っていた。

しかし、ある夜を境に、神奈と璃人の関係は一変する。

KY少女とツングレ少年でお送りする学園ファンタジー、なのかもしれない。

2011年コバルトノベル大賞一次選考通過作です。

サスペンスよりもホラーな火曜夜（前書き）

またの名を、KY少女とツンギレ王子

サスペンスよりもホラーな火曜夜

月のない夜は影が薄い。

だからこそ、自分と闇の境界があいまいになるような気がして、ひどく不安になる。

それは、今年高校生になったばかりの少女、御堂神奈^{みどうかな}にとっても例外ではなかった。

「なんで今日に限って部活が長引くよう」

間延びした声でつむがれる不満を聞くのは闇ばかりだ。

八時も過ぎると、公園も昼間と様相を一変させていた。

ふいに駆け抜けた風が神奈の肩ほどの長さの髪を翻す。視界の端に横切る影をとらえ、とっさにその方を見やるが、何もいない。

茂みのざわめきは、ただ単に野良猫が潜んでいるだけ。

見間違いや小さな物音に、ほんの少しの想像力が加わる。それだけで、通り慣れたはずの公園が、見知らぬところに見えてしまう。

しかし、ここを通るのが家までの一番の近道、手段は選んでいられない。

「神奈、女を見せるのよ。ビブレイブ！ ボーイズビーアンビシヤス！」

恐怖のあまり、独り言も迷走する。しかし、神奈はどうしてもここを通らなければいけない事情があった。今更引くことはできない。「なにも出ないよー。怖くない、怖くない」

自分に言い聞かせるためにつぶやく。だが、言葉とは裏腹に、黒目がちの瞳は、せわしくあたりをうかがっている。

すると、何かが神奈の前方を通り過ぎる。今度は気のせいではない。

学ランを着た少年だ。

形は普通の学ランだ。しかし、カラーからボタンの部分にかけて臓脂の縁取りがあるのは、神奈の通う高校のものだけ。そして、見

間違いでなければ、彼は神奈のクラスメイトだ。神奈には気がついていないようだ。

「一緒に、出口まで行ってくれないかな」

少女は淡い期待を胸に一步踏み出す。それが、始まりの一步だとも知らずに。

神奈がほんのわずかな違和感を覚えたのは一瞬。まるでなにかに阻まれるように、その一步がひどく重かったのだ。

「今の、なに……？」

いぶかしく思ってしまった、二歩目を踏みだせない。そうして立ち止まった足が、今度は後ずさりするように後ろへ踏み出される。

立ったまま夢を見るような癖はない。

想像力はあまり豊かではない方なので、常に現実を見ているはずだ。

だからこそ、自分の目の前に突如として現れたモノも、それが自分の進路を阻んでいるということもすべてが受け入れがたかった。

化け物。

声なき声で神奈はそれと呼んだ。

そう呼ぶしかない形状を、それはしていた。

姿形は犬に近いが、犬よりも大きく裂けた口からは鋭い牙がのぞく。漆黒の毛に覆われた体からは太い四肢が伸び、先端には驚くほど伸びた爪が生えそろうている。

そして、大きかった。十分な距離を隔ててもなお、すべてが神奈を圧倒し、その場から逃げることを許してくれない。

光る眼が神奈を捉えた。

本능が訴えている。

逃げなさい、と。

しかし、脳内に鳴り響く警鐘にもかかわらず、神奈の足は少しも動いてはくれない。

裂けた口からもれる唸り声と、心臓の早鐘だけが世界に満ち、視界のすべては化け物で埋め尽くされる。

今、この世界にいるのはまるで神奈と化け物だけであると錯覚してしまいそうな、長い、長い一瞬。それを経て、時は再び動き出す。化け物の四肢が大きく地面を蹴った。神奈に、飛びかかるためにまるでスローモーションにした映像のように、それは段々、神奈の視界を占めていく。

掲げられた右の前肢も、開かれた口からのぞく牙も、全てが神奈の命を奪うためのもの。

あ、ヤバいかも。

最後になるかもしれないのに、頭に浮かんだのはひどく間の抜けたフレーズだった。

走馬灯も、壮大な今わの際の言葉も浮かんできやしない。

恐らく次に聞えるのは獣が自分をなぶる音。その神奈の予想を、張り詰めた声が裏切る。

「どける！ 早く！」

予告もなく突き飛ばされれば、抗うすべもなく地面に倒れこむしかない。しかし、したたかに打った腰も、すりむいた膝の痛みも、今の神奈にはどうでもいいことだった。

なぜなら、神奈と化け物の間に入りこんだのは一人の少年だったからだ。

研ぎ澄まされた刃のような眼光で、彼は化け物を射抜く。

手に持つのは、一振りの杖。

先端に光る石がはめ込まれたそれは、木目の荒い木から削り取られたものだと分かる。

「我は呼ぶ。そなたを、誰よりも力を持ちしその姿を。我の前に示したまえ。雷電！」

少年の声に呼応するかのように、石が光を帯びていく。そして一際強く光を放った瞬間、化け物に向かって光が矢となり襲いかかる。犬にも似た、しかしもつと低く響く咆哮が公園中にこだまする。

圧倒的な存在感をもって神奈を制した獣は、今や少年によって蹂躪されようとしている。

神奈は化け物が吹っ飛んだ先と、自分を突き飛ばした少年を交互に見やり、ひたすら混乱するしかない。

飛びぬけて秀麗なその横顔は、さきほど見かけたクラスメイト――
葛城璃人かつらぎりひとのものだったからだ。

視線は化け物に注いだまま、再びなにかを音に乗せる。今度は先ほどよりも早く、低く。

「消え失せる」

冷えた、まるでなんの感情もこもっていないような声。その一言が引き金となり、葛城璃人の持つ杖から今度は炎がほとばしった。

火だるまになった化け物は、苦しみの余りのたうちまわる。そして、この世のものとは思えないほどおどろおどろしく、腹に響くような断末魔を上げ、動かなくなった。

全てが、終わったのだろうか。

少年はしばらくの間、ただ化け物を見下ろしていたが、今度は面を神奈の方に向ける。

「葛城、璃人くん、だよね……？」 常葉学園一年C組とぎわがくえんの「

しかし、彼のよこす視線は殺気立っていて、とても友好的に話せるような雰囲気ではない。

歩み寄る足取りもどこか重く、突き飛ばされて座り込んだままの神奈を見下しながら、彼は問う。

「そうだけど。誰だ、お前」

声音には、詰問の色が濃い。

クラスと一緒にあってから早三カ月だけど、随分な言い草じゃない。

などと言えるはずもなく、なんとか笑顔をひねり出して、神奈は名乗る。

「私、同じクラスの御堂神奈だけど」

切れ長の瞳が鋭く神奈を射抜く。それは先ほどの化け物に向けていたものと大差ない。

手には相変わらず杖が握られている。いつでも構えられるように、

しつかりと。

「どうやってここに入った。結界が張ってあったはずだ」

「待って。ストップ。とりあえずその杖をおろしてほしいんだけど」
懇願など気かけず、璃人は尋問を続ける。

「言え。どうしてここに入った。お前は奴らの差し金か。返答次第ではただではおかない」

彼の言葉の一つ一つが、神奈を更に混乱に陥れる。そんな中で神奈の脳裏に浮かんだのは、帰らなければいけない理由だった。

「なんでって、ドラマ……、そう！　ドラマ始まっちゃう！」

「ドラマ？」

やっと得たのは間抜けな答えで、険しいだけの璃人の表情に怪訝な色加わる。

しかし、神奈がわざわざこの公園を通ったのは、本当にただそれだけのためだった。

「そう、火曜九時から始まるでしょ！　ここ通らないと、家に早く帰れないの！」

混乱にまかせて、もはや道理を知らない子どものように神奈は喚き続ける。

そんな神奈に追い打ちをかけるかのように、璃人の脇からすり抜ける黒い影が、二人の間に割って入る。

「リヒト様、やめてくださいまし！　本当になんにもご存じでないようではないですか！」

神奈を背にかばい、璃人に向かって訴えたのは黒猫だった。

「ディアナ、お前は黙っている」

「猫が、しゃべってる」

混乱の元が更に追加されて、もはや叫ぶこともできず、神奈は呆然とつぶやく。その様を目にして、璃人はやっと力を抜いたようだ。

「お前、本当に何も知らないのか」

「逆に私が何を知っているのか教えてほしいくらい。なんで猫が喋ってるの」

神奈の疑問に璃人は答えない。答えないまま、再度焦れたように尋問を続ける。

「もう一回聞く。どうやってここに入った」

「だから、私は急いでるんだってば！ ドラマ、今日なの！」

「分かった。だったら、今すぐそのドラマのことしか考えられないようにしてやるよ」

「ちよつと、え、え、え、待って！」

ためらいもなく杖がかざされる。

ああ、自分も殺されてしまうのか。

そう覚悟しかけた瞬間、神奈は化け物の目が再び光を宿したのを確かに捉えた。

それは、璃人の方に向けられている。殺意をもって。

「葛城くん、危ない！」

抜けたままの腰も、震える体も、全てが正常に戻る。そして衝動のまま、神奈は目の前の少年に体当たりをかました。

突然の衝撃に璃人は仰向けに倒れこむ。その直後、獣の一閃が二人のいた場所を掠めた。

おそらく、これが最後の抵抗だったのだろう。再び地面に体を打ちつけたままの化け物は、ついに動かなくなってしまった。

「大丈夫？」

興奮冷めやらぬ神奈は、肩で息をしながら自分に組み敷かれている璃人に問う。しかし、肝心の少年と言えば、先ほどの冷酷な面持ちはどこへ行ったのか顔を青ざめさせている。

「俺に触るな！」

「だって、よけなきや葛城くん怪我してたんだよ！ 下手したら死んでたかも」

しかし、璃人は眼前の神奈の胸をとらえるなり、叫びは更に大きくなる。

「俺にその汚物を近づけるな！」

「花の女子高生の胸を汚物扱いとか！」

しかし、神奈の訴えを聞き入れることもなく、わめく璃人は鳥肌すら立てていた。

彼は今、明らかに怯んでいる。自分の優位を理解した神奈はこの機を逃さなかった。

倒れた時に脇に放り出してしまった鞆をひつつかむと、神奈は地面を蹴り、駆けだす。

「待て！」と制止する声が聞えたような気がしたが、後ろは見ない。捕まる時はなにをしたって捕まるのだ。今はひたすらこの場から逃げ出すことのみに徹する。

そうして、無我夢中で家にたどり着き、家の扉を開ける直前、一度だけ振り返る。

そこには、誰もいない。

影が、ふいに揺らめいた気がしたが、それを無視して、神奈は家中に飛び込んだ。

葛城男爵の家庭の事情

彼―葛城璃人は、学校では王子だの貴族だと評判の男子だった。

日本人離れした、すらりと伸びた四肢に、切れ長の涼しげな目元。髪なんかはサラサラで、いつも寝癖一つなく整っている。

整っているのは容姿だけではない。テストを受けさせれば涼しい顔をして首位になり、運動をやらせれば難なくこなしてみせる。

そう、彼は現実離れした王子様だった。纏う空気すら自分たちとは違う、異世界の住人。

一方神奈といえば、家業の特殊さと運動神経の他は、特に目立つこともない普通の一生徒。そして、顔は十人並み、それゆえ色恋とは縁遠いといっても過言ではなかった。

だから、二人の視線が交わることなど卒業まで、いや、未来永劫ありえないだろうとすら思っていた。

「葛城くん、また呼び出しされてるよ」

「今月入ってから何人目よー。これだけ呼び出されると、断るのも流れ作業だよ」

葛城璃人が女子に呼び出されたのは、昼休みが始まってすぐのこと。それを熱心に見つめるのは、神奈と昼食をとる友人たちだ。

彼は女子について行き、やがて姿を消す。もはや誰もはやし立てることもなくなってしまうた、恒例の昼の光景だった。

「アレだけ玉砕した子が多いってのに、みんな諦めないとか」

「でも、特別仲がイイ子いるってこともないし。もしかしたらって期待するんじゃない？」

「怪しい……、でもそっちの気があるようにも思えないし。男子とも話さないからね」

「王子だから婚約者とかいたりして。その子にしか人間らしい感情を見せないとか」

「ちょっと、何その妄想！ 笑える！」

無責任な妄想は留まることを知らず、格好の昼食の味付けとなる。しかし、神奈だけは黙って口の中にパンを放り込んでいる。

いや、昨日彼に脅された希少な女子ならここにいますよと、まさか言えないからだ。

今朝、神奈は始業時間ギリギリに登校した。

一体、どんな顔をして葛城璃人と会えばいいのか。とてもではないが一晩で答えは出なかった。恐る恐る教室に入って窓際の一番後ろ―葛城璃人の席を確認したが、いつも通り彼はずっと窓の外を見ていた。神奈が登校してきたことに気がついてはいないようだった。本当は、今すぐ彼と昨日のことについて話すべきなのだろう。しかし、昨日の彼の不躰な物言いと、怒りすら滲んでいた双眸を思い浮かべれば、近づくことすらためられる。

このまま、何事もなく知らないふりをしていれば、どうなるだろう。自然と浮かぶ消極的な対処法は、ひどく魅力的に映る。そして、彼は今のところ自分から行動を起こす気配はない。

「神奈。なにぼーっとしてんの」

「あ、いや、このカツサンドおいしくて」

「あんたはほんと色気より食い気よね」

「でも、意外と神奈みたいなのは恋を味わえば豹変するかもよ」

幾人かの友人から苦手な話題を振られるが、切り返しも慣れたものだ。

「私は恋の味なんて知らなくていいから、新製品のもっちドーナッツの味を知りたいな」

「まーた、あんたはなんでも食べ物に話をつなげるし」

そうしてグループの輪が笑いに包まれる。どうやら、上手くかわせたようだ。

その後、葛城璃人は顔色を変えることなく戻ってきた。いつもの通り、たった一人で。一瞬、目が合ったような気がするが、それもすべて気のせいだと神奈はやりすごす。

だから、神奈は気がつかなかった。授業が始まってから、珍しく葛城璃人の視線が教室の中に向けられていることも、それが神奈の背に注がれていることにも。

恋の味など知らないから、それなりに失敗することもある。

今、まさに神奈はその場面に直面していた。

放課後になり、部活が休みの神奈が早めの家路につこうと靴箱の扉を開けた瞬間、それは目に飛び込んできた。

無造作に置かれた四つ折りのメモ。

普通の女の子なら、このメモがなんなのか、その先に何が待っているのかを瞬時に悟り、胸を高鳴らせるのかもしれない。

しかし、神奈にとって靴箱の中に置かれた紙切れは、そのままの価値しか持たない。

「もう、ゴミくらい自分で捨てなさいよね」

神奈のぼやきと共に、紙切れは開かれることなくゴミ箱へと放られる。そして靴を履き、生徒玄関を出れば足取りはひどく軽かった。今日一日、結局葛城璃人と話すきっかけは掴めなかった。それどころか、一度も目が合うこともなく、一日を終えてしまった。

そして、いつも通り彼と遭遇したあの公園に差しかかる。

昨日の出来事が、ふいに蘇る。家に戻ってからは、なるべく考えないようにしていたことが、今この時に限ってはなぜか走馬灯のように頭を駆け巡った。

本当は、今すぐ学校に戻って葛城璃人と話をつけるべきではないのか。

しかし、そう思い至る度に残虐な獣の末路を思いだしてしまう。もし、自分の余計な一言が彼の怒りを買ってしまえば。そう思うと踵を返す勇気がわくことはなかった。

昨日ほど時間は遅くない。一日の最後の残光が空を赤く染めていて、まだ闇が支配する時間には少しの猶予がある。

「きつと、大丈夫だよね」

誰が保証するわけでもないのに、神奈は公園へと足を踏み入れる。そして、その無責任な期待はすぐに裏切られることとなる。

一人の人影によって。

遠目に見えるそれは、一見してなんの変哲もないただの人影だった。しかし、近づくにつれて徐々に鮮明になるはずが、ずっと黒く塗りつぶされたままだ。服など着ていない。それどころか顔すらない。

ただの影ではない。そう自覚した瞬間、異形は突如激しく体をくねらせ、迫ってくる。

同時に、のっぺらぼうの顔に口だけが浮き上がる。歪なそれは、見る者に嫌悪感を催させる笑みの形をしていた。どうしよう。

逡巡したのはほんの一瞬だった。神奈は、すぐさま身を翻し、出口へと向かう。

まさか昨日の一件でここまで自分に免疫がついているとは神奈自身驚きであった。

足の速さには自信がある、はずだった。

しかし、それは神奈の予想よりもはるかに早く距離を詰める。昨日の犬のような化け物よりは人に近い形をしているはずなのに、速さも威圧感もけた違いだ。

手が、伸ばされる。紙一重でそれをかわすが、恐らく次はない。

誰か、誰か。

「助けて！」

最後のあがきとばかりに、神奈は声を張り上げる。すると、目の前に一人の少年が立ちはだかる。

「葛城くん！」

学校では呼ぶことができなかったその名前を今度は高らかに呼ぶ。神奈を追跡するものを目にし、小さく璃人は舌打ちをした。昨日のように杖は持っていないが、素早く文言を口にする。

「聞け、その音を。とくと照覧あれその猛威」

神奈の脇をすり抜け、かまいたちが影を襲う。犬の化け物とは対照的な甲高い悲鳴を上げて影は地面に倒れこむ。それに追打ちをかけるかのように、更に璃人は畳みかける。

「その暴威を我に示したまえ、灼炎！」

夕日の中で神奈は青い焰を見た。揺らめく輝きをまとった黒は、踊り狂うようにもがき苦しむ。

最後まで、一片も残さずに燃え尽きるまで、璃人は人の形をしたものを見つめていた。そして、昨日と同じように全てが終わったと分かると、神奈に向き直る。

「俺は今まで掃いて捨てるほど女に呼び出されたことはあったが、女を呼び出したのも、その上すっぱかされたのもお前が初めてだ」

「ごめん」

声には、静かな怒りが滲んでいた。今の神奈にはただ謝ることしかできない。

「なんで昨日の今日でこの公園を通れるんだ。お前に学習能力は無いのか」

「ごめん」

「普通の女だったら、あんなのもう二度と見たくなくて避けるものじゃないのか」

「ごめん」

「ああ、そうか。お前は筋金入りの馬鹿だから、そんなことにも気がつかないのか」

「ごめん」

嘲りを含んだ声にも、神奈はそう返すしかない。

筋金入りの馬鹿、その通りだ。

神奈の目尻に雫が浮かぶ。自分の馬鹿さ加減に嫌気が差したからだ。しかし、その一方で璃人はわずかに表情に焦りをにじませる。

「いや、今日ちゃんとお前を直接呼び出さなかった俺にも……、非は……、あ」

「怖かったああああ！ もう今度こそ本当にダメだと思った！ あ

りがとう葛城くん！」

感情の赴くまま、神奈は心の内をぶちまける。涙をこぼすのではなく、声を張り上げ、整理しきれない感情を吐き出す。

いきなりの叫びに面食らった璃人は、気の抜けた声で問い掛けた。

「そんなに怖かったか」

「そりやもう！ あれ、なんなの！」

恐怖を吐き出した後は、純粹な疑問が湧いてくる。しかし、対する璃人は面倒くさがっていると一目で分かるほど眉をひそめた。

「お前の疑問ももつともだ。けど、あんなものは忘れた方がいい。悪いがお前の記憶を封じさせてもらう。昨日俺が使おうとしたのもそういった類のものだ」

「え、殺そうと思ってたんじゃないの」

「じゃあ、お前の望み通り」

漏れ出た素直な言葉に、璃人は気分を害し杖を振り上げたので、神奈は慌てて謝り倒す。

「嘘です、ごめんなさい」

「分かればいい。お前は一言余計だ」

「ぼやきつつも璃人は言葉を紡ぎ始める。

「痛くない？ 苦しくなったりしない？」

「集中できない。黙れ。失敗してもいいのか」

脅しに神奈はあえなく屈する。そして、何度聞いても慣れないその言葉がどれだけ続いただろうか。不意に璃人は焦り交じりに呟く。

「なんで……」

どうしたのだろうと神奈が見上げれば、そこには顔を青ざめさせた璃人だけがいた。

おもむろに彼は踵を返す。そして、短く神奈に告げる。

「黙ってついて来い。異論は認めない」

葛城璃人の向かった先は、一軒の洋館だった。どうやら彼の住居はここらしい。王子のような見た目に、家も徹底されているとは。

その上、玄関で二人を迎えたのは、執事とメイドだった。まるで漫画の中から抜け出てきたかのような、典型的なお仕着せに神奈は戸惑う。しかし、神奈の姿を目にした二人は、神奈よりも更に驚きを隠せないようだった。

「おかえりなさいませ、坊ちやま。お友達連れとは珍しい」

「レイ、こいつに茶を出してくれ」

「かしこまりました」

レイと呼ばれた執事は、比較的背丈のある璃人よりもさらに上背があった。穏やかなほほ笑みをたたえる容貌は、璃人とはまた違った方向の麗しさだ。

「ディアナは、書斎から不問の書を持ってこい。すぐにだ」

「はい」

メイドの声は、どこかで耳にしたような気がする。だが、釣り目の愛きょうのある面立ちは、おそらく初めてのものだ。

璃人に通された居間も、屋敷の外観を裏切らない豪華さだった。純和風の家に親しんでいる神奈としては、猫足のソファも、大理石のテーブルも妙に落ち着かない。

だから、執事が出してくれた茶に手もつけず、向かいのソファに座っている璃人をひたすら見つめる。彼は先ほどから、メイドの持ってきた本を繰りながら、ずっと独り言をつぶやいている。

「忘却も、支配も完璧だったはずだ。まさか、今更詠唱を間違ったなんてことは」

その言葉のほとんどは、神奈の中では何も意味をなさない。ただ焦りだけが募っていく。二人の間に流れる重苦しい空気を晴らしたのは、後ろで控えていた執事の一言だった。

「あの、お嬢さま。不躰で申し訳ないのですが、おうちは」

「神社やってます。御守城神社みずきっていう小さいところですけど」

その一言でページを繰る璃人の手が固まる。

「あのー、葛城くん？ 大丈夫？」

黙り込んだ璃人に声をかける、しかし、返ってきたのは穏やかな

らぬ声と、視線だ。

「そもそも、結界を破った時点でおかしいとは思っていたけど。やりにもよってか」

「よりにもよって？」

「いいか、お前は生まれが特殊なばかりに、神の手厚い加護がある。だから、生半可な魔術は効かない。記憶も消せない。それが今確定した」

そんな殺生など、神奈は諦めきれずに、前のめりになりながら詰め寄る。

「絶対に？」

「直接お前を触れば、効果も高まる。けど、俺はお前に触りたくない」

「一応、毎日お風呂に入ってるけど」

年頃の娘として、そして何より部活が部活だけに、入浴は欠かせない。しかし、璃人は視線をそらしながら、ぼそりと吐き捨てる。

「そういう問題じゃない」

「昨日のアレもだけど、葛城くんもしかして」

何かを勘づいた神奈の代わりに、レイが笑みを添えて続きを答える。

「坊ちゃまは、女性が苦手なんですよ」

「でも、あれ苦手ってレベルじゃないと思いますよ。触っただけなのに、なんかぶつぶつが出てたような気もするし」

「その他に、水と暗いところと高いところと蜘蛛、それから……」

レイに続きディアナが追撃する。次々挙げられる言葉を遮ったのは、璃人の怒声だった。

「俺の弱点を次々と暴露するな！」

「苦手なんて一言も言っていないですよ」

レイの冷静な切り返しに、璃人は秀麗な顔をゆがめる。

「でも、なにをどうすれば、あんなにすごい反応ができるの。私なんて胸を汚物扱いされたんですけど……」

「昔、女性に悪さをされて以来、どうにも苦手らしいですよ。水は水攻めにされたから。暗い所は一晩中閉じ込められたから。高い所はつるし上げられたから。蜘蛛は部屋中に蜘蛛を放たれたことがあるからです」

「ご丁寧に回答ありがとうございます」

「お前ら、俺のことが嫌いだろう」

もはや怒鳴る気力も失くしたのか、璃人はうなだれながらつぶやいた。しかし、神奈にはどうしても納得のいかないことがある。

「あのー、でもメイドさんは平気なの？」

「こいつは女じゃなくて雌だ」

「私はリヒト様の使い魔で、本性は黒ネコなんです」

「もしかして、昨日しゃべってた黒ネコって」

聞き覚えのある声だとは思っていたが、まさか化け猫だったとは。しかし、笑みで細められた釣り上がり気味の瞳は、確かに猫を思わせた。

「はい、わたくしでございます。ディアナと申し上げます。どうぞよろしく願います」

「猫は平気って、そんなの屁理屈じゃない！」

「知るか。そして、更に不幸な知らせがある」

これ以上なにがあるのだと、神奈は耳をふさいでしまいたくなる。しかし、璃人はかまわず続ける。

「普段は、あの獣は俺にしか見えていないはずだ。波長が違うから。なのに、あれはお前をしつかりととらえていた」

「つまり、どういうこと？」

「お前は、こちら側に足を踏み入れた」

「もつとはつきりと！ 遠慮しないで！ ちゃんととどめ刺して！」

「これから一生、お前はあの獣を見てしまっし、そうなった以上は獣もお前を狙ってくる」

「私の人生、終わった……………」

がつくりと肩を落とした少女に、この場で声をかけられる者はい

ない。しかし、諦めの悪い自覚がある神奈は、この期に及んで悪あがきをする。

「知らないふりとかしても無駄なの？」

「無理、無駄、無謀。頭から食われるのがオチだ」

「せめて足からにしてください……」

「そういう問題か」

冷静な璃人の突っ込みが、今は憎たらしくて仕方がない。だから、半ばやつ当たりのような勢いで、神奈は言いつのる。

「混乱してるの！ なんの因果で、こんな厄介なことに巻き込まれなくちゃいけないの。ねえ、葛城くんは一体何者なの」

璃人は口をつぐむ。後ろに控える二人も、主人にならない黙り込んでいる。しかし、巻き込まれた側としては、これ以上腑に落ちないこともない。

「まさか、無料で化け物退治する、ちょっと親切な通りすがりのボランティア？ ありえない！ しかも案外性格悪いし」

「それはありがとう。ガサツ女さん」

冷えた笑みとともに嫌味を返しつつも、璃人はしばらく口元に手をやり、黙り込んでしまった。そうして、どれくらい待っただろうか。おもむろに口を開いた少年は、神奈の目を見据えて告げる。静かに、ゆっくりと。

「俺は、人間と魔王の間に生まれた子だ」

汚いとは分かりつつも、神奈は指に唾をつけて、眉をなぞる。

「なんだそれは」

「いや、狐に化かされそうになったらこうしろって、死んだおじいちゃんか」

「俺をそんな下等なモノと一緒にするな」

腐っても、神社の生まれ。お稲荷さんを馬鹿に出来る程とはと、やっと彼の置かれている立場の重大さを理解する。

「魔王の子もって、もしかしてすごい？」

「魔王は、魔界を統べる者だ。俺にも、当然王位を継承する権利が

ある。魔王からたまわった爵位は男爵」

魔王、魔界、王位、男爵。その言葉の全てが途方もなく大それて現実味が感じられない。気が遠くなりそうなのをこらえて、神奈は更なる璃人の言葉に耳を傾ける。

「あの化け物は俺の領地を侵すものだ。それを俺は排除しなければいけない。そして、あの公園には、あちらとこちらをつなぐ扉がある。だから、普段は化け物が出てきても隔離された空間に閉じ込めるように、罫を張っていた。その中に、みすみすお前は突っ込んで行ったんだよ。ご丁寧な結界をぶち破ってな」

「もしかして私、思いつきり不審者だった？」

「当たり前だ。おまけに命の恩人をご丁寧に鬼畜扱いとは」

「ごめんなさい、本当に申し訳ない」

今日は彼に謝りっぱなしだ。しかし、結局璃人も最後には、嘆息とともに厳しい相好をゆるめる。

「わかつたらいい。あの公園には二度と近づくな。そうすれば、あの獣と遭うことはない。そして、このことは他言無用だ。いいな」

「ちなみに、ばらしちゃいけないのは弱点のこと？ それともあの夜のこと？」

「どっちにも決まってるだろ。言いたいことは以上だ。帰れ」

このままだと追い出されてしまうかもしれないと、神奈は慌てて問う。

「最後に、ひとつだけ教えて。どうして、そんな重大なことを私に教えてくれたの」

「お前の巻き込まれた状況が、どれだけ危険かを知ってもらったためだ。事態を軽く見て、また公園を通られても困るからな」

璃人の言葉に反論できるはずもなく、神奈は沈黙する。そして、これ以上しゃべることもない璃人も、口を開かない。しんと静まり返ったりビングで、レイが場を仕切り直す。

「今日はもう遅いので私がお送りします」

腰を折って申し出たその丁寧さは、神奈にはなじみがないものだった

た。それゆえ、自然と及び腰になってしまつ。

「大丈夫ですよ。部活がある時は、これよりも遅い時間に帰っているのです」

「お送りいたします」

有無を言わせぬ笑顔、そう形容するにふさわしいものを浮かべ、執事は神奈に迫る。

「じ、じゃあ、お願いします」

追い立てられるように玄関に向かい、最後にリビング届く位の音量で挨拶をする。

「おじやましました」

そうしてドアをくぐるが、結局リビングから璃人が出てくることはなかったのだった。

「あ、ここで大丈夫です。この先は道が入り組んでいるんで」

そうして、小道に入る前で車から降りてもらふ。家の造りも洋風だったが、車も左ハンドルの外国車だ。ボンネットの先端のエンブレムが、なおのこと高級感をあおる。

それを横目で見つつも、「ありがとうございます」というお礼は欠かさない。

「坊ちやまのことを、よろしくお願いいたします。あなたとは気が合うようなので」

散々けなされて罵倒されたあれのどこが。反論をこらえ、曖昧な笑みを返すにとどめる神奈だったが、レイは少女の意を見通すかのように続ける。

「事情が事情でしたので、坊ちゃんは今まで特に親しいご学友もつくらず、張り詰めていらっしやいました。でも、今回の一件であなたがそれを知った。秘密を抱え続ける重圧から、少しは解放されたことでしょう」

しかし、ふとレイの表情に翳が差す。

「ただ、今日のことは全て他言無用で」

「大丈夫ですよ。私、頭はあまりよくないですけど、口はそれほど軽くはないんで」

安心させようと、笑みを添えてレイに告げる。それにも関わらず、返ってきたのは穏やかな中に何かを含んだ声だった。

「それはよかった。私は坊ちゃんとは違って、それなりの行為も辞さないんで」

ひるむ神奈に意味ありげなほほ笑みを残して、執事は車を発進させた。

「それなりの行為って……、なに？」

しかし、あの主人にしてこの執事ありなのかも。腹の足しにもならない余計な想像はやめ、神奈は家に向かって一步を踏み出した。

惨劇、神社の晩御飯

葛城家を訪れた日から、少しずつ神奈の中で何かが変わっていった。

クラスメイトの男子の、隠された出自と秘密の仕事。それは神奈一人の心のうちに留めておくには、ほんの少し重すぎる。

だからこそ、いつもよりも一人の時間が好きになってしまふ。誰にも気兼ねせずため息をつける場所があればなおのこといい。

だから、昼休みの部室の掃除当番は、一人になるにはうってつけの時間だった。

早々にほうきで部屋の隅々まで掃き、換気のため窓を開け放つ。たったこれだけの仕事を済ませば、この空間は神奈のものになる。

いつもの通り買いこんだいくつかのパン、そのうちの一つをほおばろうとした瞬間、女子の声が神奈の耳に飛び込んでくる。

「あの、葛城くん。好きな人いるの」

「別に」

少女の震える声音とは対照的に、璃人の声はどこまでも機械的で平坦だ。

「あの……。私と、付き合ってほしいの」

呼び出される所は何度も目にしたが、現場に居合わせたのはこれが初めてだった。

色恋には疎い自覚はある。だから神奈には、今壁の向こうで繰り広げられている状況に、まるで現実味が感じられなかった。

「無理」

彼が発したのはたったその一言。しかしそれだけで、恋をした年頃の女の子を傷つけるには十分だった。

走り去る足音は、恐らく女の子のもの。

続いて聞えたのは、深いため息。

そして、竹刀が雪崩のように倒れる音。

間が悪く、壁に立てかけられていた竹刀に、動揺した神奈の足が引っかったのだ。

「おい、大丈夫か。……ってお前か」

慌てて問いかける声とともに、璃人が部室の中をのぞきこむ。しかし、音の主が神奈だと分かるなり、心配そうな顔が面倒くさそうな表情にとって代わる。

「ははは……、毎度ご心配をかけて申し訳ない。葛城くんこそ、こんなところで何を」

「聞いていたくせに言わせるのは、最高に悪趣味だと思わないか」彼の言う通り、しらばくれるのは無理のようだ。いつもの通り、素直に神奈は謝りの言葉を口にする。

「ごめん、無神経だった。でも、いまだき珍しいね。直接告白とか」
「ケータイの番号、誰にも教えてない」

「なるほど。なら、手紙とかは」
「いちいち返事を書くほど暇じゃない。大体、女子なんてつき合えるわけないだろ」

「それは、まあそうだけども……」

「読まずに捨てるお前よりはマシだ」

人聞きの悪い言い方だが、神奈はそれを甘んじて受け入れる。意外にも、彼は全ての手紙に目を通していうようだったからだ。

「ところで、昼休みに道場で何してるんだ」

「私、剣道部だから掃除当番があるんだよ。ちょっと休む？」

余計なおせっかいだったかなと神奈が思ったのもつかの間、珍しく璃人は素直に従う。

しかし、道場玄関から回って剣道部の部室に入るなり顔を盛大にしかめた。主に、中に立ちこめる臭気のせいで。

「これでも練習直後に比べればマシな方だよ。葛城くん、入ったことなかったの？」

「体育で柔道選択しなかったんだよ。女じゃなくても、人に触るのは好きじゃない」

なんだかんだと、文句を言いつつ璃人は神奈から距離を置いて、壁に寄りかかる。そして、腰を下ろすなり聞えてきたため息の深さが、彼の疲労を物語る。

初めて、素の彼に触れたような気がした。機械的に女子を振ってるんじゃないかと、誰かが言っていた。しかし、おそらくそれは勝手な見解だ。振る方も、きつと心に何か残ってしまう。

少しでも楽になればいいのに。

神奈はそう思わずにはいられなかった。

「ここ、私が当番のときは誰も来ないし、昼休みの避難場所にどう？」

恐る恐る提案した神奈に、璃人は口元に手をやって思案する。すぐに断らないところを見ると、好感触なのだろうか。神奈が期待とともに答えを待っていると、遠くから友人の声が張りあげられる。

「神奈ー！ また今日も掃除？」

声の元は、二階の化学準備室から顔をのぞかせた友人だった。おそらく写真部の活動中なのだろう。

「うん！」

「次の授業に遅れないようにね！」

「わかった！ そっちもね！」

外から璃人のいるところは、ちょうど死角になっている。しかし、彼は視線を恐れてか、ロッカーの陰に隠れてしまっていた。

「誰も来ないんじゃないかったのか」

「来ないよ。みんな一回は近寄ってこりてるから。そんな猫みたいに警戒しなくても」

しかし、結局璃人がそこから動くことはない。動かない代わりに、神奈の方を見やり、ぼそりとつぶやく。

「お前の名前、なんて書くんだ」

唐突な問いに、神奈は目を見張る。

「葛城くん、何回私に自己紹介させるの？」

「興味のないことと、必要のないことは覚えなない主義だ」

つまり、名前に興味をもってくれたのか。そう前向きにとらえ、神奈は名を告げる。

「神様の『神』に、奈良の『奈』で神奈」

「神の林檎だな」

何のことかわからず面食らう神奈に、璃人は焦れたように説明してやる。

「奈は林檎って意味があるんだよ。だからお前の名前は『神の林檎』だ」

「私の名前の由来は十月―神無月生まれだから神奈なんだけど」

互いに拍子抜けした間抜けな顔をさらす。しかし、璃人のあけすけな感想がすぐに返る。

「単純」

「分かりやすくいいでしょ。でも神様の林檎っていうのもなんだか可愛い感じだね」

まるで見知らぬもののようなその響きを、何度か神奈は繰り返す。しかし、璃人が抱いた感想は神奈とは違っていているようだった。

「お前、知恵の実の話を知らないのか？　って、そう言えばお前は神社の娘か」

「知恵の実？」

「神が作った最初の男女は、蛇に誘惑されて神の知恵の実を食べた。それが林檎だ。そのせい知恵をつけた二人はとがめられ、神の樂園から追放される。そういう話だ」

「へー、葛城くん物知りだね。それにしてもその二人、よっぽどお腹空いてたのかな」

神話も、神奈にかかれば食欲の問題にすり替わる。そのことへの皮肉もこめて、璃人は嫌味を一つ贈る。

「そうだな。お前みたいな林檎は、どんなに飢えても口にするのはごめんだ。食あたり起こしそうだ」

「はいはい、そうですね。でも、やっぱり普通は『奈』の意味なんて知らないよ」

「母親の名前にも『奈』がついてるんだよ。悪かったな、マニアくさくて」

「そう言えば、おうちにお邪魔した時、お母さんいなかったけど、どんな人？ 葛城くんのお母さんだから、やっぱり綺麗なの？」

男の子は母親に似るといふ。この美男子の母親だから、さぞかし美貌を誇るのだろうと、神奈は勝手に思い描く。しかし返ってきたのは、予想もしない答えだった。

「母は、もう死んだ」

なんの感情も読み取れない虚ろな声で、璃人は短くそれだけを告げる。

「ごめん、本当にごめん。無神経だった。殴って！ むしろ蹴って！ 今のは聞かなかったことにして！」

すばやく、部室の床に額をこすりつけんばかりの勢いで、神奈は謝り倒す。それに驚いたのはむしろ璃人の方だった。

「別に、かまわない。そこまで謝るな」

「だって、私いくらなんでも鈍感すぎ。もうちよつと空気読むべきだった」

「空気読めてないことは分かってたんだな」

不意に璃人が口の端をゆるく釣り上げたので、神奈も胸をなでおろす。

そうして、なんだかんだと昼休みの終わりまで璃人は部室にとどまっていた。

この日から、璃人が昼休みを剣道部の部室で過ごすことは、少しずつ増えていった。

雨が降り出した時、運悪く璃人は傘を持ち合わせていなかった。忌々しげに雨雲を見上げる。それだけで、一緒の傘に入らないかという女子からの申し出が、うんざりするほど押し寄せる。

しかし、同じ傘の中に入って、女子と密着することだけは避けたかった。それが女子のねらいでもあるが。

いい加減断り続けることに疲れ、濡れて帰ろうかと璃人が一步踏み出す。その直後、聞きなれた声が後ろからかった。

「傘はお一ついかがですか」

ビニール傘を一つぶら下げて、神奈がたたずんでいる。今日は剣道部の活動が無い日、水曜日だった。

「なんでお前と一緒にの傘なんかに」

「そう言うと思って、ちゃんと二本用意してあります！　じゃあん！」

辛辣な言葉にもめげず、神奈が鞆の中から折りたたみ傘を取り出す。そうなると璃人も引っ込みがつかず、ビニール傘を受け取るしかなかった。

そして、二つ並んだ傘が玄関を出た。

話は、神奈が主に話題を振り、璃人がそれに応える。一緒に帰るのは初めてだったが、昼休みの部室の雰囲気そのままだった。

「そういえば、雨の日に化け物たちは出て来られない。だから安心していい」

たわいもない話しの中でふと、璃人が思いついたように告げる。

「思わぬ朗報だ。」

「そうなの？　意外」

「雨は天から落ちてきたものだからな。雪も同じだ。だから、冬になつたら安心していい」

しかし、神奈の表情がふと曇る。

「葛城くんは平気なの？　雨」

「俺をそこらの化け物と一緒にするな。ホント、お前は自然に人を馬鹿にしてくれるな」

「ごめんごめん」

こうして二人が話すようになってから早一ヶ月。神奈は、すっかり彼の物言いに慣れてしまった。そして、神奈が恐れるほど璃人の怒りは激しくないと気がついた。彼は、謝れば必ず許してくれる。

「ちよっと、コンビニ寄る」

「葛城くんもコンビニ二寄ったりするの？」

そんなところで買ったものを、口にすることすら嫌がりそう。そう勝手に想像してただけに、神奈の驚きは大きい。

「なんだよ、悪いか」

「だって、王子がコンビニ……。似合わない」

「今日はレイが留守にしてるから、食事を作る奴がいらないだよ」

「レイさんがいつも食事を作ってるの？」

「ああ、他にも家計の管理だとか、車の運転だとか、こまごましたことはレイの仕事だ」

「デアナさんは？」

「あいつの本性は猫で、主食はキャットフードだ。料理の味つけをさせても、ろくなものにならない。料理以外の家事は得意だけだな」

どうやら、彼には自分で炊事をするという発想がないらしい。しかしこの年頃の男子の場合、これがスタンダードなのかもしれない。そう理解できるだけの下地が神奈にはあった。

「だったら、うちの家に来る？」

「は？　なんで？」

「うち、兄貴たちがいるから一人くらい増えてもかまわないし、お母さんもそこんとこゆるいから。一人でさびしくコンビニ弁当食べるより、そっちの方がいいんじゃない」

璃人はしばらくの間、なにか考え事をするかのように、口元に手をやっていた。しかし、結局はコンビニに入っただけで終わった。

急な申し出だったかなと神奈は後悔する。だが、彼が買ってきたのは、高校生男子の夕食にはどう見ても足りないプリン一個だけだ。それを神奈に差し出す。

「晩飯、食わせてもらってから礼だ」

「ありがとう！」

璃人が申し出を受け入れてくれたこと、そしてお礼をわざわざしてくれたこと、それらを神奈は喜ばずにはいられない。

肝心の璃人はそれをよくわかっていないようで、片眉を吊り上げ

ながら嘆息する。

「こんなコンビニのデザートで、そこまで幸せそうな顔する奴、初めて見た」

しかし言葉とは裏腹に、璃人の浮かべた笑みは、なんの含みもない少し戸惑ったような笑顔だった。

「今、葛城くん笑った!」

「見るな! 減る!」

笑ったことは否定しない。そのことが、ますます神奈の心を浮足立たせる。怒りにまじった照れの色を隠すかのように、璃人は歩き出す。だが、彼は神奈の家を知らないはずだ。

「葛城くん! 私の家、反対方向だよー!」

慌てて振り返った璃人に、こらえ切れなくなってしまうて、神奈は声を上げて笑った。

玄関に入って聞えてきた第一声は、野太い男の声だった。

「おい、神奈ー! 飯!」

「うわ、弥生兄! なんでこんな早く帰ってきてるの。というか、私はご飯じゃない」

玄関で構えていたのは、上背のある筋肉質の男だった。ひるむ璃人に対して、神奈は珍しくとげのある声で言い返す。

「雨で部活が休みになったんだよ。俺も兄貴も葉月も腹すかしてまーす」

「お母さんは?」

「帰ってきたら、こんなのが置いてあった」

今度は巨体の後ろから、細身の男がぬつと姿を現す。流行りとは程遠い黒ぶち眼鏡に、伸びっぱなしの髪が、彼の物ぐさぶりを一目で知らしめる。

「なにになに?」 睦月、葉月、弥生、神奈へ。お隣の間山さんが温泉旅行行けなくなったみたいで、キャンセル料がもつたと言わないと言うから、代わりに私たちが行くことになりました。おみやげは温泉

まんじゅうで決まりね！』まんじゅうはいいから、せめてこの欠食男児たちのために、なにか作り置きくらいしてくれたっていいじゃないよう」

「そういうことだ」

物々しい空気をまとい、廊下の奥から出てきたのは、白の小袖に浅葱色の袴の男だった。

しかし、この男だけは先ほどの二人とは違い、璃人に対して穏やかならぬ視線をよこす。

「神奈、なんだそれは」

「同じクラスの葛城璃人くん。わが家の食卓にご招待一名様です。よろしく！」

「お邪魔します」

一礼して、表面上は従順さを装えば、袴の男は口をつぐんでしまふ。どうやら、道理の通じない男ではないようだ、と、璃人は彼を評する。その隙に、今度は怒涛のような神奈の家族紹介が始まる。

「紹介します。袴履いた陰険そうなのが睦月兄、ガリガリメガネが葉月兄、筋肉ダルマが弥生兄です」

順々に紹介していく神奈に、遠慮はない。しかし、それは的確でもあり、璃人は一発で覚えることができた。

「ちなみに、誕生月は」

「名前の通り」

ひねりも何もあつたものではない。だからこそすがしくもある命名法だ。

「十二月生まれがいなくてよかったな」

誰にも聞えないほどの声で、ぼそりと璃人はつぶやいたのだった。

夕食を用意する神奈の手際は悪くなかった。むしろ手慣れていたといつてもよいほどで、あつという間に食卓に唐揚げ、サラダ、味噌汁、ご飯が並ぶ。

それから、まさに戦場というにふさわしかった。山盛りになっ

た唐揚げが、秒刻みで減っていく。しかし、そんな中では会話は絶えない。そして今日の主役は、もちろん客人である璃人に他ならなかった。

「へえ、神奈と同じクラスなのか。それにしても、細いなー。食え食え。筋肉つける」

大学生になったばかりだという三男の弥生は、神奈と似た顔立ちだった。性格もよくいえばおおらか、悪くいってしまえば大雑把だと端々ににじみ出ている。

「いえ、これで十分です」

無言でサラダを取り分け璃人の前に置いたのは、次男の葉月だ。こちらは弥生と対照的に細身で、箸の進みは速いにもかかわらず、栄養がどこに行っているのか不思議なほどだ。

「ですから」

「神奈の作った飯が食えないのか」

「……………いただきます」

長兄・睦月の脅しにも似た言葉に、璃人は屈する。先ほどこから、彼が璃人に向けるのは威圧するような眼差しで、それには悪意すら含まれていた。

「で、なんでうちに来た」

「御堂……さんに誘われて」

呼び捨てにしかけた瞬間、睦月の双眸が鋭さを増す。それは次に神奈にも向けられる。

「神奈——！　兄さんはお前をそんなふしだらな妹に育てた覚えは」

「睦月兄に育てられた覚えなんてないけど。食事の時ぐらい荒ぶらないで！」

妹に一喝され、睦月は再び席に着く。だが、璃人に向けられる威嚇の視線は変わらない。

表面上は、食卓に平和が戻ったかと思いきや、今度は葉月がおもむろに神奈の前に茶碗を突き出す。

「おかわり」

「葉月兄、自分で盛ってよ」

しかし、二男が腕を下ろすことはない。その上、ぼそりとつけ足すように言いつのる。

「誰かに盛られたら、メシウマ」

「お願いだから日本語しゃべって。あとメシウマの意味が違うと思うの」

「神奈、俺も俺も！」

弥生まで茶碗を突きだすものだから、仕方なく神奈は立ちあがり、乱暴によそってやる。その姿はさながら母親のようだった。

その部屋は、黒を基調としていた。壁一面も家具も、そして窓の外から見える景色も暗く沈んでいる。

部屋の中には、これまた黒のビロード張りの椅子にぞんざいに座る男と、その前に跪き頭を垂れるレイだけがいた。

「で、あれの様子は？」

黒髪に黒い瞳、ついでに纏うものまで黒一色。この部屋の主は、まさに部屋の一部として完璧な調和を生み出している。

しかし、同時に彼は、ひどく目立つ。まるで、黒く磨かれた宝石のように存在感をかし出すのだ。

「相変わらずです。何事もなく。ただ、新しいご友人ができたようです」

「へえ、あの偏屈に。よほど人間ができてる少年だな、そのご友人とやらは」

「いえ、ご友人は女性の方ですよ」

ゆつたりとくつろいでいた男が瞠目する。その変化をレイは見逃さない。

「何それ、面白いし」

「ええ、とても興味深いですよ。お会いになれますか？」

口元に手をやって、男はしばらく思索する。だが、それに反比例

して答えは短かった。

「いや、今はいい」

今は。その言葉に含まれる僅かな企みの色をレイは捉えていた。

「何やら企んでいらっしやいますね」

「あ、バレた？ でも、あんまりちやかすなつて言われてたしなー」

「坊ちやまのことは私にお任せ下さい。ルナ様から、直々に仰せつかっておりますので」

その名前を口にした瞬間、黒の男の顔が歪む。不服そうな、拗ねた子どものようなそれに、レイは気がついていていた。

しかし、あえて無視をし、一礼の後、レイは部屋を辞したのだった。

外に出ると、まだ雨は止んでいなかった。

皿洗いを兄たちに押しつけて、神奈は璃人を送りに出た。出掛け際に、睦月が護身用に木刀を差しだし、「急所は体の中心だからな。情け容赦は禁物だ。男相手に遠慮はいらない」と神奈に言い含めるのを振り切った。神奈曰く、長兄の愛は歪んでいるらしい。

「びつくりしたでしょ。うちは兄弟多いから」

「なんていうか、お前のがさつさの原因が分かったような気がした」
「生まれた頃からあんな感じだったからね。特に弥生兄とは殴り合
いしてたし」

さすがに一回り近く年の離れた睦月とは喧嘩はなかったが、それでも男兄弟とまとめてたくましく育てられた自覚はある。

「確かに驚いた。でも、俺も兄弟は多いから」

「意外、一人っ子だと思ってた」

「一人っ子どころか、異母兄弟が六百人程」

その桁数に、思わず神奈はのけぞる。魔王様、子沢山すぎです。

「ちなみに同居経験は」

「俺が小さい頃は父親の所で一緒に住んでいた。けど、お前の所と違って、もつと殺伐として、気を許せなかった。だから、母は俺をこっちに連れ戻したんだと思う」

そう語る璃人の表情は決して明るいとは言えなかった。異母兄弟で王子ともなれば、神奈では推し量りきれない複雑な感情が絡み合うのも当然なのかもしれない。

「もしかして、水責めにされたり閉じ込められたりつるし上げられたり蜘蛛を部屋中にばらまかれたりしたのって」

「全部異母兄弟達の仕業だ。まあ、兄弟喧嘩みたいなものだろう」

「それにしてもやりすぎだよ」

「兄弟といっても所詮、領地争いの相手に過ぎないからな。それくらいして当然だ」

「領地争い？」

「そういえば、言ってなかったか」

しかし、何か含みのある視線で神奈を見やる璃人がいた。それは、公園で見た剣呑さと似ていて、彼が葛城璃人ではなく、男爵として何かを思案しているのだと神奈は察する。

「私、ばらしたりしないよ？」

璃人の意を素早く解し、神奈は言葉を告げる。そこでようやく璃人は重い口を開いた。

「俺たち魔王の子どもは、生まれるとすぐに領地を与えられる。領地といっても魔族にとつての区分だから、こつちの人間にはたいして関係ないけどな。そこを守りながら、領地を拡大しなければいけない。奪われたら王位は継承できなくなるし、領地争いの末に殺されることもある」

不意に聞かされた物騒な言葉に、神奈は面食らった。

「殺されるって……。じゃあ葛城くんも」

その先を言うのは、さすがにはばかられる。しかし、神奈の心配をよそに、璃人はなんのことなしに答えた。

「お前が想像するような、そんな野蛮な真似はしない。俺は脅しをかける程度だ」

「そっか、よかった。兄弟喧嘩がそこまでなっちゃうと嫌だからね」
安堵のため息をつく神奈の表情が、明るさを取り戻す。こうして

ここで話している友人が、傷つけたり傷つけられたりするかもしれないという事実は、受け入れがたかった。

「男爵の仕事って他にもあるの？」

「ああ、領地を守る以外にも、色々」と

「大変だね、学校だと女の子苦手なのに相手しなくちゃけないし」

「大変なんてもんじゃない。地獄だ」

「学校、やめたくなったりしない？」

璃人が不意に黙り込む。そこでやっと神奈は、自分の言い方が不躰だったと思い至る。

「いや、変な意味じゃなくて。私だったら、苦手な物がうようよいるところに行くって想像しただけで、ぞっとするから」

「遺言だ、母の」

ぼつりと、凧いだ調子の声が短く言う。

以前は、その話題に触れた時はひたすら謝るしかなかった。しかし今日はどうしてか、神奈はその続きを黙って待った。それが、彼の為になるような気がして。

「俺は、魔王の息子だ。けど、人間の生活も忘れるなって」

遺言、その言葉に含まれた重さを理解できないほど神奈は鈍くはない。

遺された言葉、それを彼は果たそうとしているのだ。

急に押し黙った神奈に、璃人は自分の言葉を思い返し、吐き出すように告げる。

「なんでこんなことを俺はべらべらとしゃべってんだ。今のは忘れる、いいな」

「うん、忘れる」

忘れたことにしておく。けれども、璃人の中の大切な部分を覚えておこうと、密かに神奈は誓う。

それから、とりとめのない会話が続いた。少しでも、璃人の表情を和らげたくて、下らないことばかり口にする。そんな時間はあっという間に過ぎ、ここでいいと璃人が自宅の近くの大通りで告げ

る。

「いいか。念のために言うが、帰りにあの公園だけは絶対に通るなよ。それから、なにかあったら絶対に呼べ」

連絡用に電話番号とメールアドレスを交換したのは、璃人が部室に顔を出すようになってすぐだった。いつ神奈がドジを踏むか分からないからと言うのが彼の言だが、そのことが神奈を安心させたのも事実だ。

「また、いつでも来てね」

何かを言いかけて、璃人の口がから回る。少なくとも、神奈の目にはそう見えた。

「飯、うまかった」

雨音にかき消されて璃人の声は、神奈まで届かない。

「え？ なにか言った？」

「早く帰れて言っただよ！」

「はいはい、じゃあまた明日ね！」

踵を返し、璃人は家の方へと歩み出す。その背が見えなくなるまで手を振って、神奈も家路についたのだった。

「おかえりなさいませ、リヒトさま。お食事はどうでした」

「まずくはなかった」

事前に連絡はしていたが、面白がるようなディアナの声音に、璃人はぶつきらぼくに返す。しかし、そんなことで怯む彼女ではない。

「おいしかったんですね。それはようございました」

「騒がしい食卓で全然落ち着けなかった」

「その割には、ご機嫌はよさそうですね」

全てを見通すような物言いが癪に障り、璃人は自室に引き上げることにする。

「疲れたから、もう寝る。朝にシャワー入る」

「かしこまりました。歯はちゃんと磨いて下さいね」

最後の方は、ドアを閉じてしまったため聞えなくなる。自室の静

けさが、妙に耳に残る。

こんなものは、昔から変わらなかったはずなのに。

けれども、くすぐったいような、もどかしいような、形容しがたい感覚に襲われ、それをふりきるように、璃人はベッドに倒れ込む。しかし、そのまま寝入ることはできない。

「ご友人の家で、夕食を召しあがったそうで」

不意に現れた気配に璃人はたじろぐこともなく身を起こす。彼が神出鬼没なのは今に始まったことではない。

「レイ、帰っていたのか」

「リヒト様、あなたは現魔王陛下の六百六十六番目の御子なのです。なのにその体たらく。人を喰らうならまだしも、馴れあうなど」

遠回しに彼は言っているのだ。臆病者と。だが、そこで逃げ出すほど璃人は弱くはない。

「俺は、そんな畜生みたいな真似はしない。正々堂々、魔王になつてみせる」

「正々堂々？　笑わせて下さる。魔王の血を引く者が何をおっしゃいますか。魔族なら魔族らしく、誰を陥れてでも欲しいものを奪い取るべきではありませんか」

時々、この男はこういう物言いをする。そうするだけの实力がある。

彼は人ならざるものだ。そして璃人とは違い、その血は生粋のもの。

母親が存命の頃から彼は使えているから、時折そのことを忘れそうになってしまう。

「ルナさまの名誉を取り戻したくはないのですか？　ご実家からは魔王と交わった異端者、魔界では脆弱なものと蔑まれたあの方を、あなたは裏切るのですか」

「母の名誉は必ず回復してみせる」

母親の名を出されれば、璃人の表情が陰しさを増す。

「ならば、あの少女を使えばいい。純潔の乙女を汚せば、それなり

に負の力も得られましょう。人や兄弟を屠るのが嫌だと申されるのなら、そうするほかありますまい」

あの少女。それが差すものを瞬時に悟り、璃人は最早冷静でいられなくなる。

「ふざけるな！ あいつは無関係な人間だ」

「無関係ではないのなら、欲しいと思いませんか？ どこにも行かないように閉じ込めて、自分だけを見るように」

「ありえない」

「本当にそう思われますか？ だとしたら随分と中途半端でいらっしやる。魔族としては足らず、人としては汚れすぎている。所詮、あなたは混血ですね」

魔族と、人間の混血。半端者。

それは、璃人が常に囚われなければいけない呪いのような言葉だった。そして、葛城家の中では、はっきりと語られることはない禁句のようなもの。

しかしレイは今、それを躊躇わず口にした。

璃人は、言葉を失う。

「では、まだ仕事がありますので」

最悪の後味を残して、レイは璃人の部屋から出て行く。そうして残された璃人は何度も彼の言葉を反芻する。

じわじわと蝕まれるような感覚が、不快だった。それは、遅効性の毒のように、時間をかけて、苦しみを長引かせる。

「それでも、俺は……」

こんな時に限って彼女の笑顔を思いだせない自分に嫌気が差し、璃人は瞳を固く閉じた。

外の雨音が、やけに耳障りだった。

息子の彼女は俺の嫁

いつもならば一時の休息となるはずの、部室での昼休み。しかし、いつものように壁にもたれかかった璃人は深いため息を吐き出す。

「葛城くん、顔色悪いけど、寝不足？」

「ああ……」

「ちゃんと寝ないと。予鈴鳴ったら教えるから、ちょっと寝たら」

ここ最近の彼はいつもそうだった。疲れが神奈にも見てとれるほど濃く、部室にいるときも、張り詰めた面持ちを崩すことはない。

思えば、彼を夕食に招いた次の日から、段々彼の顔色は青ざめていったような気がしていた。元々が白いだけに、それは余計に目立つ。

「いい、これくらい平気だ」

「ねえ、なんか私にも手伝いつてできない？ 学校にも来て、お仕事もして大変だし、魔術がもし簡単だったら私も」

思いつきで言いかけた言葉は、璃人の険のある言葉によってさえぎられてしまう。

「バカ、あれは素人が興味本位で足を突っ込んでもいい分野じゃない。それにもっと繊細で、集中力がある奴に向いているものだ」

「集中力なら……、一応これでも剣道の全国大会に出るんだけど」

その言葉に偽りはない。先日行われた県大会で神奈は見事入賞を果たし、夏のインターハイへの切符をもぎ取った。

しかし、神奈に向けられる、いらついたような視線は変わらない。むしろ、鋭さを増したようにさえ見える。

「とにかく、この話は終わりだ」

「ごめん、考えなしだった」

「そう思っているなら放っておいてくれ」

いつもなら、謝れば「もういい」と言いつつも彼は表情をゆるめてくれた。しかし、今は部室に落ちる沈黙がひどく重苦しい。

結局、予鈴が昼休みの終わりを告げるまで、二人は交わす言葉もなく、ただ板張りの床を見つめるしかなかった。

「眠気、よくなった？」

放課後、いち早く校門を通り抜けた璃人の後ろを神奈は追った。

彼の帰宅はいつもすばやいが、今日は輪をかけて早かった。

振り返った璃人の面持ちは、やはり暗い。

「またお前か。なんで水曜でもないのにこんなところにいるんだ」

「またとは何よ。今日からテスト週間で、部活は禁止。だから、一緒に帰ろうと思って」

しかし、彼がよこしたのは、神奈の予想もしない、ひどく冷めた言葉だった。

「もう俺に近づくな」

「なんで？」

なにかしたかと考える前に、言葉は口について出た。いきなりこんなことを言われて引き下がるほど、神奈はもう璃人のことを遠い人間だとは思えない。

何度か、ためらうように璃人は口を空回らせた。そして告げられた言葉で、二人の時は止まる。

「お前、ウザい。おせっかいすぎ」

もう、どうしても問うことはできなかった。神奈は答えーひどく簡潔で、だからこそ心をえぐるには十分な言葉を得てしまったから二人とも、微動だにしない。そうしている間にどんどん下校する生徒が増えていき、二人は好奇の視線にさらされる。

それから先に逃げ出したのは神奈だった。

傍から見れば、また一人葛城璃人への思いが砕け散った女子が増えただけなのだろう。

しかし、その中の誰もが、璃人もまた表情になにかを堪えるような暗さを宿していることに気がつくことはなかった。

ひどい、ひどい、ひどい。

なんだ、あの言い草は。

「ひどい」

怒りにまかせてずっと学校から走ってきたが、ついに立ち止まってしまう。それでも、口からはするすると言葉が溢れだす。

「葛城くんのバカ、アホ、陰険野郎」

一度つぶやいてしまえば、あとはもはや垂れ流すだけだ。

「冷血漢、コンビニ王子、ツンデレ！ あ、でも全然デレないからツンツンか……」

冷たくされても、最後まで突き放さなかったこと、コンビニのプリン、部室で過ごす昼休み。次々思い浮かんでは、先ほどの言葉に打ち消されていく。

『ウザい』

彼の踏みこんではいけない領域に、神奈は踏みこんでしまったのだ。そうして、あっけなく拒まれてしまった。

「仲良くなれたと思ってたの、私だけだったんだ……。バカは私の方が」

後はひたすら自己嫌悪だった。それでも、公園を通るなど言う璃人のいいつけは守り、遠回りをして家にたどり着く。

「ただいま……」

「なんだ、暗いぞ。何かあったのか」

こんな時に限って、過保護な睦月が出迎える。目ざとい彼は、妹の異変を見逃さない。

「別に……」

「あの葛城とかいうクソガキのせいかな」

余計な詮索をされたくなくて、靴を脱いで自室に逃げ込もうとするが、その前に全てを見破られてしまう。

路上ではこらえたものが一気に溢れだし、神奈はなににもかもを吐き出すように大粒の涙をこぼす。一粒溢れればそれが呼び水となり、次々とそれは頬を伝う。

「わ、悪かった。兄さんが悪かった。頼むから、泣かないでくれ」
慌てて睦月は妹をなだめるが、神奈の嗚咽が止むことはない。むしろ一層激しさを増していく。

ごめんね。

こんなところから届かないと分かっているのに、泣き声に交じってただそれだけを叫ぶ。

何度も繰り返したその言葉。それに続く不満そうな、けれども仕方ないと言いたげな顔。

それさえ見られれば安心することができるのに、もう二度とあの表情を見ることが叶わないような気がして、神奈を絶望だけが満たしていくのだった。

家路を辿る璃人の頭の中で、神奈の表情がフラッシュバックする。何度も目にしたことがある表情。それは傷つけられ、拒まれた女子たちが璃人の前を去る間に浮かべる表情とひどく似ていた。

もうとつくに慣れたはずだった。しかし、今の璃人は後悔している。彼女に、そんな表情をさせたこと、その原因が自分であること。何度、携帯電話のディスプレイに浮かぶ彼女の電話番号で、通話ボタンを押そうとしただろうか。しかし、その度に衝動を堪えた。自室に閉じこもって不貞寝を決め込んでからも、後悔は募るばかりだ。

同時にこれでいいのかもしれないとも思う自分に璃人は気がついていて。

これで、彼女と出会う前に戻るだけだ。誰とも交わらず、日々をやり過ごすだけ。

彼女と過ごす日々が異質すぎたのだ。

魔王の息子、そんなものが手を伸ばすにはまぶしすぎるもの。相反する二つのものが混ざり合ったってろくなことになりはしないのだ。

そうして脳裏に浮かぶ能天気な笑顔をかきけしなくて寝返りを打

つが、それと同時に璃人は違和感を覚える。

馴染みの、どちらかと言うと苦手な感覚。似ているものがあるとするなら、窓もドアもない部屋に閉じ込められたときの遮蔽感だ。起き上がり、窓の外をのぞくと、空が濁っている。結界を通して見る空はいつもそんな感じだった。

この屋敷で、結界を使えるのは璃人の他にもう一人しかいない。

「なんのつもりだ、レイ」

男はもう既にいた。音もなく、気配も消し、璃人を見下ろしながら佇んでいる。

「いい加減、愛想が尽きました。あなたは魔王陛下とルナさまのご子息に相応しくない」

「だからなんだというんだ」

投げやりな調子に、レイは片眉を不快そうに振り上げた。

「坊ちゃま、私はね、これ以上あなたに失望したくないんですよ。

だから、ここで全て終わらせます」

そうしてレイの手が、璃人の首にかけられる。璃人は抵抗を試みるが、馬乗りになった男の言葉に全ての力を失ってしまう。

「お許しください、ルナ様」

その一言で、璃人は「何故」と問いかけるのをやめた。

唐突に理解してしまったのだ。幼いころに見た、彼が母に向けていた眼差しの意味を。

彼もまた魅入られたのだ。あの、優秀すぎた、美しい魔女に。

失敗作である魔女の息子を殺す。それはおそらく彼なりの愛なのだ。

彼は、必ず成し遂げる。逃げても、罠がはってあるはずだ。

ここで全てが終わるのか。

それも、いいかもしれない。

どちらにも混ざれない半端者が、生き残ってどうするというのが、そう、思った。

璃人は自嘲気味の笑顔を浮かべその時を待つ。そうして、閉じた

臉の裏に、遠い幻を見た瞬間、それは訪れた。

呼び鈴が一度だけ、こだまする。

最初は無視していたレイも、やがて激しく鳴り響くそれに動揺をあらわにする。訪問者は、確実に中で何が起こっているのか勘づいている。

続いて、何かが破壊されるけたたましい音が鳴り響く。おそらくドアが破られた。

その全てに遠慮などなく、倒れる音、割れる音、裂ける音、ともかく不穏な音は止む気配を見せない。

まるで家の中に竜巻が一つ入りこんだような。そういった雑多な音の嵐だ。

それはついに、二人のいる部屋、璃人の自室の前まで迫ってくる。「葛城くん、ここにいるの?」

どうして。璃人はほとんど吐息だけで呟く。

張り詰めている空気が馬鹿らしくなるほどの呑気な声で彼女は問う。しかし、返事を待たずして部屋と廊下を隔てる扉は、呆気なく破られた。

一本の木刀によって。

舞い散る扉の木片の中、木刀を携えた神奈が姿を現した。

「葛城くん、大丈夫?」

制服のまま木刀を引っ提げて、彼女は来た。

この場を完全に支配していたはずのレイもさすがに言葉がないらしく、口を開けてその姿に見入っている。

「バカな。これは攻撃型の結界のはず」

他者を拒むだけでなく、結界を傷つけようとする者を痛めつける類のものだ。そんなものを破ってまで彼女はここまで来た。

おそらく、璃人を助けるために。

「あの、もしかして、お邪魔でした?」

間の抜けた声。しかし、それはレイの氣勢も見事に殺いでしまう。深いため息の後、髪をかきあげて、レイはベッドの上の璃人に冷

たい一瞥をくれる。そして、たった一言だけを残す。

「興が醒めました。しばらく暇をいただきますので。では、また会う日まで」

そう言っただけでレイが身を翻せば、霧となり姿は消え失せる。残された二人は、ただ彼の名残を言葉もなく凝視するしかなかった。

先に動いたのは神奈だった。未だ動けないままの璃人に近寄ると、言い訳が始まる。

「あ、ご、ごめん。ドアとか他のところの修理代はちゃんと払うから。あと、興奮しすぎて花瓶とかも割っちゃったけど、片づけは手伝うし」

どれだけ自分のしでかしたことが異常であるかは分かっている。勝つてみせたのだ。しかし、その勝因はすぐに知れることとなる。

「これ、うちのご神木から切り出した木刀。睦月兄が持つてけてまさか、こんなところで役に立つとは思わなかったけど」

「何で来た」

拒むようなその冷たい声に、神奈の笑みが引いていく。二人の間に、重苦しい静寂が満ちる。

「心配だったから」

ぽつりと、神奈は呟いた。それを皮きりに、堰を切ったように言葉が溢れだす。

「今日、ろくに目も合わせてくれないし、私がまた何かしたかなって心配だった。私、馬鹿だから、また葛城くんを傷つけるようなことと言ったんじゃないかって悩んでたら、そしたらこの子が私のところに来てくれて、葛城くんがヤバいって教えてくれたの」

相変わらず神奈の説明はあまりうまくない。ただ、だからこそ璃人に伝わる必死さが、神奈の言葉にはあった。

神奈の後ろには、猫の姿のディアナがいた。彼女を睨みつける璃人の瞳に怒気が宿る。

「ディアナ、お前余計なことを」

「怒らないで。だって、この子が葛城くん家に入れないって教えてくれなかったら、葛城くんどうなったかわからないんだよ?」

「お前みたいな非力な人間が来て、なにができるんだよ!」

璃人は、声を荒げる。空気を震わせるその勢いは、公園に踏み入ったことをとがめたときのものと同じだ。

あの時はただ恐ろしいばかりだった。

しかし、今ならばわかる。

彼は、神奈の身を案じているのだ。

今回は、たまたま木刀があってそれが助けとなった。しかし、下手をすれば神奈が結界に傷つけられていたかもしれない。

しかし、神奈は引かない。今度こそ、揺るがない。

「確かに、私は人間で、馬鹿で、弱くて、葛城くんを守ってもらって思わないと、怖くて仕方がないよ」

現に、公園を避けて通学していてもなお、あの獣を見てしまわなしか神奈は不安であった。携帯電話も、以前のように鞆に放り込まず、常にポケットに入れておくようになった。

いつでも、彼に助けを求められるように。

「でも、葛城くんのは誰が守るの」

怒りに満ちていた瞳が、見開かれる。そして急速に色を失い、璃人は俯いてしまう。

「情けない、下らない。どうしても俺はこうなんだ」

「完璧じゃない自分は嫌い?」

「嫌いだ、いや嫌いなんてもんじゃない。憎んでさえいる。誰かに守られたり、優しくされないと生きていけない自分など」

魔王の息子で、王子で、男爵。彼の肩に乗った称号は多すぎる。いっそ、投げ出してしまう方がいいのに。けれども彼は逃げない。どんなに傷ついても。

「私は、守ってもらえとほっとするし、優しくされると嬉しいよ」
確かに、おせっかいかもしくない。鬱陶しくて、目ざわりになるのかもしれない。

それでも、こうして目の前で折れそうな彼を、放っておくことはできなかった。

「どうして、お前は俺の側にいる」

「側にいたいと思ったの。葛城くんを一人にしたくないって」

彼の手をとって、ぬくもりを伝えたくて、一人ではないのだということを教えたくて、神奈は手を伸ばしかける。

しかし、それすらも彼を傷つけるのだ。

友達一人慰められない、非力な人間。確かに、彼の言う通りなのかもしれない。

「葛城くん、それでも私は」

神奈の声は、遮られる。ガラスの砕け散る音によって。

一瞬、何が起こったのかも分からずに二人の視線が一気に音の方へへと向けられる。

「よう、元気か？」

いつの間にか暮れていた日を背に、それは部屋の中へと飛び込んできた。

まず、目に入ったのは、黒いだけの翼。爬虫類の皮膚に似て羽などないむき出しのそれが、一はためきする。翼の主は、男だった。

黒髪に、黒い瞳。纏う服も黒で揃えてある黒づくめの男。

しかし、全身を黒で染め上げても彼の纏う空気だけは隠せない。

存在感を体現したような、そういう男。

「おお、グッドタイミング！ この子、借りてくから。無期限で」

訳も分からず硬直するしかない二人に対し、一笑した男はおもむろに神奈を抱きかかえる。

ちょっと、待って。

そう叫びたいはずなのに、口も、指の一本すら動かない。抵抗も出来ずに、なすがままになってしまう。

そのまま、神奈と男は窓から飛び立った。

「放してー！ー！嫌ー！ー！」

信じられないことに男は背中中の羽を大きくはためかせ、悠々と空を飛んでいる。

しかも、今の空は神奈の知るそれとは違っていた。夕日が消え失せ、不自然なまでに赤黒く染まり、違和感が覚ええない。

そして下を見下ろせば暗い闇ばかりで、何があるのかも分からない。彼が何事かを呟いたら、もう二人はここにいたのだ。

「魔界は初めてか？ まあ、そう固くならないでもいいぞ。いやあ、しかし若い娘つてのはやっぱりいいもんだな―」

そう言いつつ、からからと笑う男に対して、神奈は冷静でなどいられるはずもなく、腕の中で暴れまわる。

「一体なんのつもりなんですか！」

「何のつもりって、息子の彼女に会いたいと思うのは父親の当然の心理というか」

「息子って、どちらさまでしょうか」

下から見上げる顎のラインや切れ長の瞳、その整った容貌に見覚えがないわけではない。けれども、神奈はそれを否定したくて可能性から目をそらす。

しかし、男の答えは見事に裏切ってくれる。

「リヒトのことだけど。あれ、我^{われ}もしかして間違ったりした？」

「葛城くんは彼氏じゃないです！ お友達！ はなはだしい間違い！」

しかし、神奈の慌てぶりに男ははじけるように笑う。面差しは確かに似ているが、どうやら気質は水と油程に違っているようだ。

そして女性の扱い方も。

「なんだ、ならば我が妻にしても一向にかまわないということか」「はい？」

抱きかかえているから、必然的に顔の距離は近いが、それを更に縮めて男は不穏な色をくわえる。

「そつだな、久しぶりに人間の妻を娶るのも悪くないな。待遇は保証する。どうだ」

「お断りします」

迷う余地もなく、神奈は否の答えを突きつける。つれない少女の言葉に魔王である男は面食らったように言う。

「この魔王を相手に恋の駆け引きとは」

「いいえ、お断りしたらお断りです。大体、久しぶりって」

「ああ、リヒトの母親だ。ルナという魔女でな、あれも人間であるのに、面白い女だった。俺の言うことなど一つも聞かないで、リヒトを連れていって、我は寂しかった」

一瞬気弱な表情をして見せるので、神奈はほだされそうになってしまう。しかし、そもそもその原因を思い出し、眉をひそめる。

「でも、あなたは他の奥さんとお子さんが、六百人くらいいるって聞いたんですけど」

「アレは特別だ。まあ、特別扱いが過ぎたせいでやつかまれたようだがな」

その言葉がひどく神奈の心を逆なでする。

「あなたには親心つてもものがないんですか。葛城くんがどれだけ恐怖症に苦しんでるか」

「人間のお嬢さん、忘れてはいけない。我々は魔族だ。我々を支配できるのは道德ではなく本能のみだ」

魔王の目が妖しく光る。一瞬それに魅入られそうになるが、ぐつと瞼を固く閉じ逸らす。

「魔王の力をもってしても魅了も効かないとは。ますますルナに似ている。あれが執着するのも、無理ないか」

「どういうことです」

その意味がわかっていない神奈に魔王は告げる。どれほど、そのことが稀であるかを。

「普通は、魔王とその子には魅了されずにはいられないはずだ。どおりで、あの癪癪持ちが気に入るはずだ。魅了に左右されず真の自分を見てくれる人間など、それだけで付加価値が高いからな。きっと、大事に大事に閉じ込めてくれるだろう」

「葛城くんはそんなことしません。性悪ですけど……」

「あれも、リヒトもしょせん我の血を引いている。今はまだ人間のようにふるまっていられるだろうが、いずれ血に抗えなくなる。それでも、あれの側にいると言えるのかな」

まるで、お気に入り玩具を振り回して、壊れないかを面白がっている子どもだ。明るくて残酷な声。しかし、それを真正面から受け止める神奈の瞳は揺るがない。

「私は、葛城くんと一緒にいます」

怖がって、逃げ回って、遠回りをした。だからせめて今からでも神奈は迷わないことにする。たとえ、彼がここにいらなくても。

「勇ましいな、人間の娘。ますます気に入った。しかし、邪魔が入ったようだ」

魔王が見やった先に、つられた神奈は視線を向ける。璃人だ。

しかし、彼の背には魔王と同じく羽が生えていた。その色は魔王とは違い、深い青―瑠璃色に染まっている。

あれが、彼の本当の姿なのだ。

だが、どうしてか。この男の羽を初めて見た時のような恐怖が微塵もない。ただ、神奈の胸には璃人が来てくれたことへの安堵だけが溢れる。

「ふざけんなクソジジイ！」

「おー、若いのはいいねえ。勢いがあって。ついでに魔性に目覚めてるし。ルナが死んでもダメだったくせに、男つてのは現金だなー」

「んなことどうでもいい。今すぐ御堂から手を放せ」

低い声、怒りを宿した瞳。そのどれもが、神奈の感じたことのない璃人の苛烈さをにじませていた。

だが、対する魔王は笑みを崩さない。

「じゃあ、お望み通り」

あ、と神奈が思った瞬間から、一気に空が遠のいていく。魔王が、少女を抱えていたはずの手を放したのだ。

「神奈！」

今度の叫びは怒りではなく、焦り。そう冷静に分析してしまうのは、この状況を受け入れられない混乱ゆえか。

落ちるよりも早く、璃人が追う。少しでも、その手に触れたくて、神奈は精一杯腕を伸ばす。あの時差し伸べられなかった分も、触れたくて、近づきたくて。

ここに来て。

恐怖もなく、神奈は呟く。

そして、璃人は神奈の腕をとると、そのまま抱きしめるように神奈を受け止める。

思いがけないその感触に、神奈は瞠目する。だが、驚かされたのはそればかりではない。

「葛城くん、そういえば高いところ大丈夫なの？　しかも私に触ってるし、じんましんが」

「そんなこと言ってる場合か！　死ぬところだったんだぞ！」

間近で怒鳴られればつい肩も震えてしまうが、よく見れば璃人の腕も小刻みに震えている。そして神奈の肩を掴む手はきつく、痛みすら感じるほどだ。

「葛城くん、震えてる」

「お前が死ぬかと思った。だから、怖くて」

彼は、失うことを恐れている。邪魔だったなんてきつと勘違いだったのだ。こんなにも、璃人は神奈を必要としている。

少しでも安心させるために、彼の背中を撫でてやる。そして、耳元でそつと囁く。

「ケリをつけるよ。葛城くんのお父さんと」

「あんなクソジジイ放っておけ」

そうして璃人は遠ざかろうとするが、神奈はもう一度瞳を見据えて、璃人に請う。

「どうしても言いたいことがあるの。お願い」

一つ嘆息して、璃人はゆるゆると下降していく。地面に降り立つ

と、魔王もそこにいた。

真正面から自分をさらった男を睨みつけ、一つ深呼吸をすると神奈は一気に言い放つ。

「あなたは、なんのためらいもなく私を放しました。でも、彼はここまで私を追いかけて、そして手をとってくれた。だから、私はあなたよりも葛城くんの側にいたいと思うんです。もし、葛城くんが私と違うものでも、いつか歩く道が別になっても、私はそうします」

璃人は、神奈に目を奪われる。堂々と、魔族の王たるものに、ここまで言うてのけるその度胸に、感動すらしていた。

「いやー、見事に振られちゃったね。オジサン、ショック。失恋とか何百年振りだっけ」

「魔王のくせに、随分と軽いのね」

「元々こういう奴だ。だらしないけど、特に女にだらしない」

神奈を後ろに庇い、璃人は父を睨みつける。警戒は決して解かない。

「ショックだからー、お邪魔とかしたいな。若い二人に障害はつきものだし? ということで、出でよケルベロス」

その声に答えて空中から姿を現したのは、一匹の犬だった。

ただし、三つの頭を持ち、犬と称するには余りにも大きな体躯をしてはいるが。

「では、また会おう。生きていたらの話だが」

そして、男は翼をはためかせ、あつという間に空の彼方に消える。

璃人も、神奈を抱き上げると、空に逃れようとする。しかし、獣はそれを許さなかった。

獣は空を駆けたのだ。その爪は璃人の翼を斬り裂き、二人は地面にその身を打ちつける。

「い、った………」

痛みに打ちひしがれ、なんとか両手をついて起き上がった神奈が目にしたのは、横たわったままの璃人に、今にも襲いかかるうずめるケルベロスの姿だった。

ダメ。

考えるよりも先に、神奈は駆けだしていた。

「うおりゃああああ！」

神奈が手近にあった木の棒を拾い上げ、ケルベロス頭のうちの一つを殴りつける。しかし、残りの二頭は、一つの口から発せられる悲鳴にも構わず、神奈に狙いを定めた。

神奈は棒を構えなおし、一人と一匹は間合いを取りながら睨みあう。

人間ごときになにができる。その言葉を忘れたわけではないが、だからといって逃げることはできない。

強く握りしめら拳に汗がにじむ。脳裏に響く鼓動の早鐘が、ひどく耳障りだ。

来る。

しかし、飛びかかろうとした獣は、前に素進めないことを訝しく思い振り返る。

そこにいたのは、左手でケルベロスの尾を掴み、右手を大きく振り被った璃人だった。

「飼い犬ごときが、神奈に触れるな！」

璃人が与えたのは右の拳の一閃のみ。だが、ケルベロスは吹き飛び、したたかに木々に体を打ちつける。

しかしそれだけでは気が済まないのか、更に璃人は手を掲げ、詠唱を始める。

「轟け、うめけ、天の眷属。貴様の敵を打ち滅ぼせ。一片も残さずに！」

雷鳴が、二度、三度と三つ首の犬を直撃する。しかし、璃人の詠唱は止まらない。それを制したのは神奈の声だった。

「葛城くん、落ち着いて！」

「言うことのきけない犬は躰ける。常識だ」

そうして睨みを利かせると、黒焦げになりながらもまだ息があったのか、キャンと一鳴きする。

どうやら、実力の差を思い知ったようだ。

「さつさとテメエの主人の所に戻れ。さもないと」

最後まで聞かずにケルベロスは脱兎のごとく空をかけていったまう。

それが見えなくなるまで構えていた二人は、安全が確認できると、まるで糸の切れた操り人形のように地面に座り込む。浅かった呼吸は徐々に平常に戻っていき、神奈は自分を救ってくれた少年に向き直る。

「いや、本当にご迷惑をおかけしました。さらわれてしまって、お恥ずかしい」

「迷惑をかけたのは俺の方だろ！ お前はどれだけお人よしなんだよ！ それに少しは怖がれよ！ アレは、地上に出てきた化け物とは段違いなものなんだぞ！」

璃人の剣幕は尋常ではなかった。それほど、あれは危険なものだったのだ。

しかし、神奈はその怒りをいなしで、おちついた声音で告げる。

「怖かったよ。でも、葛城くんがいてくれたし。それに、あそこで葛城くんが死んじゃったら、ここからどうやって戻ればいいかも分からなくて私も食べられて終わりだったよ」

「だからっていつて」

「葛城くんが死ぬ時は、私も一緒だよ」

いつものように、気の緩んだ笑顔でも、ふざけた様子もなく、真摯な面持ちで神奈は告げる。対する璃人は、力なくつぶやく。

「俺は、お前のそういうところが恐ろしい」

魔王の息子が恐ろしいなんて、自分はどれだけ恐ろしいものなのだろうと思うが、そういえば彼には苦手なものがたくさんあった。

今度こそ本当に嫌われちゃったかな。

そう思ったが、璃人は立ちあがると視線が下のままの神奈に手を差し伸べる。

「帰るぞ、神奈」

手を差し伸べてくれたこと、そして何より彼の言葉に神奈の顔がほころぶ。

「さっきからずっとそうだったけど、名前で呼んでくれるんだ」

「いちいち言わなくてもいいだろ！」

照れたようにそっぽを向くが、その頬が少し赤い。恥ずかしさが明確に伝わってくる。

「ごめん、ありがとう」

手を取り、神奈を立ち上がらせると、璃人はためらいもなく神奈を抱き上げる。そのことに何の疑問も抱かず、神奈ただ身を任せた。彼の腕の中は心地よい。

「女の人、触れるようになったんだ」

「お前限定だ」

ぶっきらぼうにそう言い捨てて、璃人はひたすら前だけを見据えていた。

「もう、こんな茶番はこれでおしまいだ。お前は、これから上に戻るまでに記憶を消す」

突然の宣言に、神奈は目をむく。そういえば、直接触れないことが、記憶を封じる上での唯一にして最大のネックだった。その問題が解決された今、璃人は躊躇わない。

しかし、神奈は到底受け入れられないといった風に身をよじる。

「待って、なにそれ」

「待たない。だめだ。もうこれ以上お前を巻き込めない」

何かを堪えていると分かる声で璃人は言う。胸が痛くなるような響きが胸を締めつけるのとは裏腹に、段々と瞼が重くなるのを神奈は自覚する。

おそらく、もう始まってしまっている。

「林檎なんて食わなきゃ、何も知らなきゃ二人は幸せでいられた。だから」

待ってと、口を動かすことすら今はひどく難しい。

「さよなら、俺の初めてのの——」

その、最後の声を聞くこともなく、神奈の意識は闇へと落ちた。

そして、十月林檎は笑う。

彼女―御堂神奈は取り立てて目立つところのない普通の女子だった。

顔は十人並み、特に気が利くわけでもなく、強いていうならば、運動神経は目を見張るものはあるが、時にそれは野蛮にすらうつる。魔王の息子である自分には、彼女は平凡で、けれどもその平凡さがどれだけ眩しいものなのか、やっと認めることができた。

彼女は、十人並みであるのに強い女の子だった。普通だからこそ、背負うものがないからこそ、重さも辛さも、なんなく受け入れてしまふのだ。

その強さに、すがってしまいそうになる自分が許せなかった。だから終わりにした。

あの日、魔界から帰って、彼女は全ての記憶を封じられた。もう二度と浮かび上がることもないように嚴重に閉じこめて。

これから、二人の視線が交わることはない。以前のように、領地を守り、誰とも関わらず、日々は流れて行く。そういうはずだった。

いつも通り学校に行き、誰とも言葉を交わすこともなく授業をやり過ごし、昼休みに少し苦しい思いをして、下校する。

変わらない流れ作業をこなし、璃人は放課後にあの公園へと向かう。何日かに一度、化け物が捕まっていないかの確認だ。

もう二度とあの少女が恐ろしい思いなどなくて済むように、見回りの頻度を増やした。この公園を通らないように暗示をかけておいたが、念には念を入れておく。

あの少女に出くわした日のことは、鮮明に思い出せる。混乱してドラマのことを連呼されたときはさすがに面食らったが、あんな状況でも、泣かずに喚くことができたのがいかにも彼女らしい。おかし

くて璃人は知らず知らずのうちに、口の端をつり上げていた。

夕暮れに染まる公園には人影は見当たらない。異変も特に見当たらず璃人は踵を返そうとするが、ふと鞆の中の振動に気がつく。

ディアナだろうか。レイがいなくなつた今では、璃人の電話番号を唯一知る彼女のしか相手はありえない。しかし、ディスプレイに映し出されたその名前に、彼は動揺を覚える。

何度も、消去しようとした。けれども、その度に未練がましく、せめて残しておきたいと願つた番号だった。

長い逡巡の後、震える手が通話ボタンを押し、恐る恐る答える。

「はい……、もしもし」

「まずい林檎はお一ついかがですか？」

その言葉に、璃人は目を見張らずにいらなかった。

「しらばつくれればいいのに、びっくりしてるの、後ろからでもバレバレだよ」

電話と背後の二方向から、声は降ってわいた。振り返ると、神奈が佇んでいる。

「どうして、なんで……。封じ込めたはずだ。もう思い出すことはないように」

「睦月兄たちが、次はいつ葛城くんを連れてくるかってきいてきて、それがきっかけ」

たった一度の訪問だった。しかしそれを覚えていてくれた嬉しさ、戸惑いがないまぜとなり、璃人はただ表情を強張らせる。

「そして、決定打がこれ」

神奈が差し出したのは、着信履歴だ。

そこには確かに葛城璃人の名前が記されている。神奈の携帯電話に残した自分の番号の存在を、璃人はすっかり忘れきっていた。

「駄目だよ。証拠隠滅はちゃんとしないと」

言葉とは裏腹に、その声はからかうような軽いものだった。久方ぶりのその抑揚が、璃人の耳によくなじむ。

「それに、私は葛城くんと一緒にいたこと、忘れたくないって思っ

たから、多分思い出せたんだと思う。なのに、葛城くんってば無理矢理記憶封じ込めちゃうし」

神奈は最後の最後まで抵抗していた。

だが、全ては神奈のためだった。自分に関わったがために、一度は魔界に連れ去られた。

そんなもの、忘れた方がマシなはずだ。

「これ以上お前は見る必要なんてない」

「見られるのが怖いだけのくせに」

「お前に何が分かる」

「分かつとしても教えてくれないくせに」

神奈は引かない。逃げ出して、掴みそこないそうになった璃人を、逃さない。

「弱虫」

璃人は答えない。返す言葉を持たない。

「女嫌い、陰険、口汚い上に無愛想」

罵られているはずなのに、その口調はひどく優しい。まるで、そのダメなところごとく包み込むように。

「でも、そういう葛城くんと一緒にいたいよ。それじゃ、だめ？」

璃人はとづくに気がついていて。もう、答えなどとうに決まっているのに、見ないふりをしていたことに。

こんなにも、この少女を求めている。

「俺の負けだ、神奈」

もう、その声に背くことはできそうになかった。食べてしまった林檎を元に戻せないように、なにも知らなかった頃に戻れないのだ。見上げてくる瞳は、なんの濁りもない。一度は突き放し、ひどい言葉で傷つけて、逃げだした。

しかし、今彼女はここにいる。

だから、もう璃人も迷わない。

「食ってやるよ、芯も実も皮も種も丸ごと。覚悟はいいか？」

「いつでもどうぞ、葛城男爵」

挑むような口調とは裏腹に、神奈の顔には笑みが浮かんでいる。そして、璃人も釣られて破顔して、身を翻した。

「どこいくの？」

「帰るんだろ、一緒に」

歩みを止めないのは、神奈がなんと答えるか知っているからだ。

「うん！」と即座に答え、少女もその背を追いかける。

地面に、二つ並んだ影が落ちる。

寄り添うようなそれを照らし出したのは、林檎のように赤く染ま
った夕日だった。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0215z/>

十月林檎と葛城男爵

2011年12月2日19時57分発行